

こどものうた

大槌 優子

何気なく題を書いて、改めて考えた。「こどものうた」、こどものためのうた、こどもが歌ううた、こどもに歌ううた、そのどれをも含めて、おとなとこどもと一緒に歌う、歌い継がれるうたという意味になるだろうか。つまりは、チェコの民謡、民族のうたである。

ブラハに住んで、昔なつかしいうたに時おり出会った。チェコ語で歌えない時、「ラララ……」とメロディと一緒に口ずさんだら、まわりの人がびっくりした。

「あら、あなたは、このうたを知っているの?。」

「これは、チェコのうたなの? 日本で歌っていたもの。」

私は、違う意味でびっくりして、お互いにびっくりした分だけ親しさを増す経験を重ねた。

子ども達がピアノを習い始めた頃、自分で歌いながら弾いていた。日本でよく使われる『バイエル教則本』に対応する初心者用の教科書は、この国独自に創られた『ピアノの学校』である。幼稚園のうた遊びによく登場する民謡が中心になっている。子ども達と歌いながら、

そこでもなつかしいメロディーに出会い、チェコ語の歌詞を覚えた。

チェコの民謡が、日本にどのように導入されたのか、またどのようにして日本語の歌詞がつけられたのか、詳しく調べたことはない。暮らしの中で気づいた、日本で歌われるチェコの民謡をいくつか紹介しよう。

○「おお、野原、緑の野原」(楽譜1)

おお、野原、緑の野原

草が育ち、高くおい繁る

小川に水が流れ、渦を巻く

と続く歌詞からも想像できるように、「おお牧場は緑」

と日本で訳されて歌われている。

チェコの地形は、全体としてゆるやかな丘陵地帯で、

牧草地が広がっている。枝を広げた菩提樹の大木、こんもりとした深緑の森がその広がりに変化をつくりだしている。チェコ語の歌詞にある、小川の「清い水」は、かなり都心から離れなければ、今ではもう見られないが、こ

のうたの舞台は、チェコのありふれた風景である。

日本で歌われる時は、ここに紹介する譜のAの部分を繰り返さず、Dの部分を省いているようである。

○「がちょうがとんだ」(楽譜2)

チェコの画家であり、児童文学者でもあるヨゼフ・ラダの小さな作品に、『J・ラダのABC』がある。チェコ語のアルファベット順に、短い詩が並べられ、独特の雰囲気をもつ絵が添えてある。その「H」は、*Husicka* (がちょう) で、民謡の歌詞「がちょうがとんだ」になっている。

がちょうがとんだ

たかくとんだ

とびこえられず

小川におっこった

日本では「気のいいあひる」という題がついている。鶺鴒も家鴨も食料用に飼い慣らされて、元祖の鴨のように長距離を飛べなくなってしまうことを歌っている。

< 樂譜 1 >

Musical score for "樂譜 1" in 2/4 time, key of D major. The score consists of six staves of music. The first staff is labeled 'A', the second 'B', the third 'C', and the fourth 'D'. The fourth and sixth staves include first and second endings.

< 樂譜 2 >

Musical score for "樂譜 2" in 3/4 time, key of D major. The score consists of three staves of music.

チェコの村々では、鶯鳥や家鴨がたくさん飼われていて、列をなして歩いているのをよく見かける。勿論、食料用である。よく太るように、庭先きで、おばあさんが一羽ずつひぎに抱えて、ゆでたとうもろこしを口に詰め込んでいるのをながめた時、この歌がユーモラスでなくなってしまう。

歌の後半「トゥララ……」も、日本で歌われる時とほぼ同様である。終わりの二小節だけが少し違っている。

○「おやすみ、よいこよ」(楽譜3)

これは、スロヴァキアのうただが、チェコでもスロヴァキア語のまま歌われている。

おやすみ、よいこよ

おやすみなさい

神の御加護があるように

おやすみなさい

やすらかに

楽しい夢がみられるように

床に入った幼な児に語りかけるように、やさしくゆったりした雰囲気で歌う。子守りうたである。

私の家庭では、普段の言葉に日本語とスロヴァキア語を使っていることもあって、子ども達の大きくなった今でも、よく歌う。スロヴァキア語で、または、日本語で。親が子どもに、子どもが親に、あるいはおとなの間で、仕事や勉強で就寝時間がずれることへの思いやりをユーモラスにこのうたに託そうという感じである。ともかく、日常の言葉をメロディにのせたというふうな素朴な歌である。

日本では、「キャンプのうた」という題がついているようである。

○「こねこは、穴を這う」(楽譜4)

こねこは、穴を這い

いぬは、窓をとび越える

雨が降らなければ

ぬれないでしょう

< 楽譜 3 >



< 楽譜 4 >



意味を考えてもよくわからない。言葉の音のおもしろさが中心になった、明るい歯切れのよいうたである。幼児もよく歌う。

この長調のメロディーを、短調に変えて、叙情的に歌いあげてみるとどうだろうか？ きつと荘厳な交響詩の一部の主旋律に重なるだろう。チェコの有名な作曲家スメタナの交響詩「我が祖国」の中の「ウルタヴァ」である。日本では、ケルト語に由来する「モルダウ」の名でよく知られている。

チェコの子ども達は、「ウルタヴァ」メロディーをきくと、このうたのことばをのせて口ずさむ。私達が、「ウルタヴァ」のロマンティックなメロディに酔い、ウルタヴァ川を流れる水と共に、チェコの田園風景を讚美し、チェコの歴史に思いを馳せている時、小さな子ども達は、素直に「こねこは穴を這い、いぬは……」と歌いながら、私達と同様にこの音楽の美しさを自分のものにしていく。

○「ビヤダルポルカ」

ポルカは、舞曲の一種で、一八三〇年頃にチェコでつくられた形式である。ポルカというから、ポーランドの舞曲かとなんとなく思っていたら、チェコの社交的な民族舞踊の曲だと教えてもらった。二拍子で、テンポが速く、明るい曲が多い。男女が組になって、くるくるまわりながら踊る。

この「ビヤダルポルカ」は、チェコのポルカとして世界中に知られている。日本でも、運動会の会場に流れて、活気あふれた雰囲気をつくっていたように記憶している。しかし、これは、チェコ語本来の題名ではない。自分の好きな女の子を残して、兵役の義務についた若者の「成就しなかった愛」を歌うロマンティックなうたである。ドイツ語で歌われるまでは、歌詞もメロディーも原曲通りだったが、英語圏に入った時、「ビヤダルポルカ」になったと聞いた。私がチェコの原曲を聞いた時、曲の感じが全く違うので、はじめは「似ているけれど、別の曲」と、思っていたほどである。

村々のお祭りといわず、町なかの公園の野外演奏会でも、このポルカの曲をきく。小さいな子たちが向きあつて、手を相手の肩や腰にまわし、ギャロップしながらくるくるまわって、一人前の踊り手になっているのは、ほえましい光景である。

(ブラハ在住)

